

台湾「^{ハリー}哈日族」の嗜好品文化——アイドルとアニメグッズをめぐって

1. 研究目的

台湾では、「^{ハリー}哈日現象」という日本のポピュラーカルチャーに対する積極的な受容が1990年代後半に現れ、その当事者である「^{ハリー}哈日族」とともに研究者の注目を集めてきた(岩淵, 2001他)。しかし、^{ハリー}哈日現象の最大の特徴である「<日本>への愛着」⁽¹⁾は自明のこととして扱われている。また、日本のアイドルやアニメに夢中になっている^{ハリー}哈日族がその関連グッズを嗜むこと、及びそれに伴う日本へ強い想いは、よくメディアに取り上げられる事象である(張, 2014)。それにも関わらず、消費の側面ばかりが注目される結果、「<日本>への愛着」は消費主義に還元されてしまう。本研究では、^{ハリー}哈日現象の文脈の下で、アイドルやアニメグッズを^{ハリー}哈日族の嗜好品として捉え直し、^{ハリー}哈日族の「<日本>への愛着」を分析することを通じて、嗜好品の概念を広げを試みる。

2. 研究方法

- フィールドワーク：アイドルやアニメグッズの専門店が集中する地域：「台北西門町」と「台北地下街」で店舗の様子と消費者の行動を中心に参与観察を行った。
- ライフストーリー調査：11名の^{ハリー}哈日族に対し、^{ハリー}哈日族になった経緯、アイドルやアニメキャラクターへの愛着、グッズの購入と収集などを中心にライフストーリー調査を行った。
- グッズコレクションの写真分析：調査対象者の許可を得た上での自宅訪問や、調査対象者にグッズコレクションの撮影や写真の提供を依頼した。

3. 研究結果と考察

3-1 台北西門町と台北地下街

- 台北西門町：日本直輸入の老舗CD専門店、雑誌専門店、アイドル・アニメグッズ専門店。特にアイドルファンの^{ハリー}哈日族にとってはグッズを入手するための重要な場となっている。
- 台北地下街：ゲーム・フィギュア、同人誌取扱店、メイドカフェ、執事喫茶などのオタク文化の関連産業が集中する。とりわけ男性オタクをターゲットにしたガンダムプラモデルや美少女フィギュアが圧倒的に多い。

3-2 嗜好品としてのグッズコレクション

● 記憶装置としてのグッズコレクション

ほとんどの調査対象者は小・中学生のころからグッズを集めており、そのコレクションは膨大な数である。その中の一つひとつのグッズは、人生の特定の経験や時点の記憶の記念碑として位置付けられる。グッズに関する思い出を考察することを通じて、グッズが^{ハリー}哈日族の日常生活と人生形成に深く関係している、ということが明らかになった。

(1) ここで言う<日本>とは、主に消費やメディア視聴を通じて受容される日本イメージ、及び日本を想起させる諸記号を指す。

● 哈日族の「妄想」の投影

調査対象者の多くは、グッズを日常生活で使うことで、常にアイドルやキャラクターへの愛着を意識している。この「愛着」には、グッズに詰まったアイドルやキャラクターと関係する個々人の思い出だけではない。ファンによって繰り返して想起され、語られるからこそ、ファンとアイドルやキャラクターの構築的關係性、またはアイドルやキャラクターへの「妄想」が生まれる。ここで言う「妄想」は従来の病理的な意味ではなく、とりわけオタク文化などの領域においては、対象に対する深い欲望から、自分で満足感を得るために対象の様々な「萌えポイント」を読みとりつつ、キャラクターに対して感情移入をし、またはキャラクター同士の關係性を積極的に想像するということを意味する（森永，2005他）。本研究では3名の事例を挙げ、哈日族がグッズコレクションを通してアイドルやキャラクターに向ける視線と妄想に、彼／女らの性的指向と性的欲望が反映されている、ということが説明された。

● <日本>への眼差しを分散させるプリズム

アイドルやキャラクターをめぐる哈日族の語りの中の<日本>イメージに注目すると、哈日族はどのようにアイドルやキャラクターの背後に凝縮されている<日本>を意識しているかが明らかになった。グッズコレクションというプリズムを通して見た哈日族の<日本>への眼差しは、マイクロレベルのアイドルやキャラクターをめぐるセクシュアルな妄想に加え、<日本>＝「進歩」というマクロレベルの集合的イメージ、といった二つの次元が重層的に結合している。こうした重層的な眼差しは、哈日族の「<日本>への愛着」の重層性を具体的に示している。すなわち、マイクロレベルの「<日本>への愛着」に関しては、日本のアイドルやキャラクターへの愛情や欲望を通して表現されている。マクロレベルでは、「<日本>への愛着」は<日本>を進歩と中国への対抗の象徴として捉える親日の文脈を継承する（李，2005；Lee，2015）。アイドルとアニメグッズという嗜好品には、アイドルやキャラクターへの愛着、及び進歩への渴望と中国への対抗意識が混ざりあった若者世代のアイデンティティと複雑な感情が寄託されている。

4. 結論に向けて

本研究は哈日族のアイドルとアニメグッズコレクションを嗜好品として捉え直すことを通じて、哈日族の「<日本>への愛着」の重層性を解明した。すなわち、哈日族の日常生活ないし人生形成と密接に関係しているアイドルとアニメグッズはプリズムのように、哈日族の<日本>への眼差しを、アイドルやキャラクターへのセクシュアルな欲望と、親日的な感情に分散させる。これは、哈日現象の文脈において、アイドルとアニメグッズが嗜好品として果たす機能である。本研究を踏まえ、他の外来文化への愛着をグッズを通して分析することで、さらに嗜好品の概念を広げることにつながるだろう。

主な参考文献

- Lee, Ming-tsung, 2015, "Discoursing "Japan" in Taiwanese Identity Politics: The Structures of Feeling of the Young Harizu and Old Japanophiles." *Taiwan Journal of East Asian Studies*, 12(2): 49-103.
岩瀬功一, 2001, 『トランスナショナル・ジャパン』岩波書店。
森永卓郎, 2005, 『萌え経済学』講談社。
李衣雲, 2005, 「実像と虚像の衝突——戦後台湾における日本イメージの再上昇の意味、1945-1949——」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』69 : 137-159。